

獅子島・長島の旅



江藤 ヤエ子

一九六五年から三年間暮らしていた長島へのツアーが企画されていたので、友人を誘って参加した。

鹿児島中央駅・西口八時集合である。私は三十分前に着いたのだが、市内に住む友人の方がなかなか来ず、心配していると滑り込みセーフでホツとした。「急に行かなくなつたと思つたわ」と、私が言うと、彼女は、「バスが込んでいて遅れたのよ」と汗を拭いていた。南九州高速道路経由なので途中、美山でトイレ休憩あり、薩摩川内で三号線に入る。市内も土曜のせいか、シャッターが閉まつた店が

多く、寂れたなあと思うことだった。阿久根に入り、海が見えると、遠く甕島も眺めることができた。

黒の瀬戸に架けられた大橋も無料になり、交通量が増えたそうだ。旧東町側の道路を通るのだが、昔、私がスクーターで走っていた道路よりも上の方に、広い道路が整備されていて、初めての島に來た感じになつた。私が住んでいた頃は、長島町と東町が同調できず、高校も本校と分校に別れたままだったが、現在はその高校も阿久根に併合されている。私が、初めて赴任する時、校長から、「東分校に行つて下さい」と言われ、私は本校の方がいいのと思つたのだが、当時の長島町には肉屋も無く、淋しい所だと判り、分校で良かったと思つたのだった。東町には鷹巢銀座があり、まだ橋は架かつていなかったが、住みやすい所だった。

長島の北端・薄井から乳之瀬橋を渡り、諸浦島から、天長フェリーに乗船、沖子島の片側港に渡る。二十分で着いた。桜島フェリーと同じで、バスに乗車したまま移動が出来た。昔は、夏休みの地区PTAに、小型船を雇って渡った島だったと思うと、近くの小島にも橋が架けられていて、便利になっているのに驚いた。

御所ノ浦にある「金比羅」で海鮮グルメの昼食となる。一行四十七名。大広間に、二列にテーブルが並べてあり、向かい合った四名で、組板に並べられた刺身を食べた。頭と尾で境を作り、四人前に切り分けてあり、遠慮せずに箸を伸ばすことができた。「採れたてで美味しいわね」友人と笑顔で話す。

刺身の他にも鯛と鰯の姿焼きがあり、野菜サラダ、胡瓜の酢の物、味噌汁、蛸の入った混ぜ御飯である。刺身の醤油で口の中が辛く

なっていたので、甘酢の胡瓜が美味しかった。「お腹一杯になったわね」テーブルの下に足を伸ばして寝転びたくなった。

二時間の食事時間を取っており、満腹になった客が退屈しないようにと、店の女主人は、甘夏蜜柑を剥いて出したり、インスタントコーヒーを出したりと、精一杯のサービスをしていた。もう動きたくないと、のんびり話している間に、溝辺から参加した女性たちは、近くの土手からツワ藪を沢山採ってきたので感心した。無料で土産が出来たのだ。時は金なりの見本だと思った。

獅子島の人口は八百人だそうで、店の近くにある獅子島小学校は、全員で十四名の児童とのこと。島を一周すると三十六キロである。島の反対側には幣串小学校があり、両校の児童は、片側港の上にある中学校に通学するのだ。この島では児童の顎骨が発掘されたので、

同時に出たアンモナイトと恐竜のミニユメントが、港に展示してあった。友人と並び、記念写真を書いて貰う。

十四時の船で長島に戻り、近くの針尾公園に寄る。展望台から雲仙天草国立公園の島々を眺め、眼下に広がる「薩摩松島」の景色を楽しんだ。「洒落た名前を付けた観光所だね」と、昔住んでいた時には無かった場所での保養ができた。

此処では「花の祭典」も開催されていてルーパーン、金魚草、パンジー、ポピーなどの花も綺麗に咲いていた。三十分後の集合に、またまた溝辺の方たちが、蕨を一握り採ってきたので、目の付け所が違うのだ。私には見えない山菜の場所が判る人たちに頭が下がる思いがした。「毎日、採りに行っているから」とは溝辺の人たちの言葉である。

長島での最後は、黒の瀬戸にある「だんだ

ん市場」での買い物だった。私は甘夏六個入った袋を二百円で求めた。友人は、島でしか販売していない芋焼酎「島美人」を購入していた。美味しいと噂のある酒らしい。「息子への土産よ」と言う、友人が羨ましい。

長島では二十一基の風車が建っていた。県内では一番だそうだ。私は大隅にも沢山動いていると思っていたので、長島の方が、風力発電にも力を入れていることが判った。今年特に、東日本の災害後、電力不足を心配しているので大いに助かることだろう。

島では馬鈴薯掘りが盛んだった。家族で掘った薯を集めていたが、小さい物は畝に捨ててある。マイカーで来たのなら、拾って帰るのにと行うことだった。蒸してバターをつけて食べたら、美味しいだろうと想像するだけで唾が出てくる。

四十数年前に三年間住んでいた島でのこと

を、思い出しながら帰途についた。一学期の終了式が終わると、日直以外の職員で釣りに出かけ、その獲物を料理して反省会をしたものだった。大きな蛸を土間に叩きつけて、塩で揉んで滑りをとってから茹でることも、その時教わった。削ぎ切りの稽古もしたが、上手には出来なかった。釣りをしたことのない私は一匹しか釣れなかったことまでも。

体育祭の前夜の大雨で、グラウンドに水溜りがあった時、生徒たちと雑巾かけをしたことも忘れられない。長島は赤土で水はけが悪く、水溜りの水を雑巾に吸わせては、バケツに絞ったのだった。その学校跡地には立派な町役場が建っていた。

島の周囲では真珠の養殖もしていて、真珠を採った後の貝柱の天麩羅を、主事が弁当のおかずを持って来ると、若い先生達が喜んで食べていた。

正月の新年式後には、主事宅で、祝い膳も出たので、手伝いをして、その時、なまこも覚えたのだった。懐かしい同僚の俵を目に浮かべながら、教え子たちは元気だろうか、現在は二名の生徒としか賀状の交流もないことを思い、自分が長生きしていることに感謝しつつ、鹿児島で友人と別れた。

